

まちかど・ズームIN!

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

国体を成功させよう! みやぎ国体広報キャラバン隊



来年開催されるみやぎ国体の開催機運を盛り上げようと、7月6日、みやぎ国体の広報キャラバン隊が市役所を訪れました。訪れたのは、みやぎ国体の広報活動などのために県が募集したボランティア「ケヤキークラブ」の皆さんで、「全国から集まる選手とともに、喜びや感動を分かち合える大会にしましょう」と書かれた浅野知事のメッセージを読み上げました。
= 白石市は新体操と山岳競技の開催地です =

きれいで明るい校舎に変身! 第一小学校大規模改修工事落成



児童や父母、教職員などによるワークショップをもとに、平成10年4月から改修工事を進めていた白石第一小学校で7月11日、落成式が行われました。今回の改修工事により、余裕教室の活用や障害者用トイレの設置など、ゆとりある明るい教育環境に改善されました。また、記念植樹も行われ、白石と歴史的ゆかりのある福島県三春町から寄贈された滝桜を、児童の代表者たちが体育館南側に植樹しました。

手話を通じて ふれあいの輪



▲手話劇「金のがちょう」の様子

第14回「手話劇」

障害者と市民とのふれあいの場にしようと、白石しらゆり会主催の恒例行事である手話劇が7月2日、中央公民館で開催されました。今回の手話劇は、おばあさんが山に捨てられるおなじみの昔話を基にした「ばあさまと殿様」で、手話サークルのメンバーや聴覚障害者の方によって演じられ、「高齢者を大切に」を訴えました。このほか、障害のある子供たちな



▲手話オペレッタ「金のがちょう」

ずっと長生きしてネ 齋藤サツキさんが満100歳



6月30日、大鷹沢大町にお住まいで、市内では2番目の長寿となる齋藤サツキさんが満100歳の誕生日を迎えられました。この日、サツキさんは体調を崩されており、市役所を訪れた長男の哲雄さんに特別敬老祝金100万円が贈られました。サツキさんは、明治33年大鷹沢生まれ。現在は長男夫婦、孫さん夫婦、ひ孫さんとの6人暮らしです。体を動かすことが好きで、普段は庭の手入れやひ孫の相手をしているそうです。ずっと長生きしてください。

商店街の散策を楽しむ まちかど博物館

市内商店街の軒先やショーウィンドーに、そのお店にある昔懐かしいカメラや時計などを展示する「まちかど博物館」が、6月24日から7月2日まで開かれました。これは、商店街の協力を得て、市民グループ「蔵富人」が白石の再発見を目的に行っている恒例イベントで、今年が9回目となりました。期間中は市民や観光客が、昔の生活用具や商売道具に時代の風情を楽しんでいました。



健康長寿のまちづくり さわやかフェスティバル



7月9日、恒例のさわやかフェスティバルがホワイトキューブで開かれ、コンピュータによる健康診断などのコーナーに、約3,000人の市民が詰めかけました。また、ステージでは、専門医などから「脳血管の老化を防ぐ」などの話があったあと、タレントの清水アキラさんが「わたしの健康法」と題して体験談をもとに講演。笑顔の中に健康づくりがあることなどをユーモアを交えながら話されました。

この模様は、8月31日8:35~9:23のNHK総合テレビ・生活ほっとモーニング「健康スペシャル」の中で放映の予定です。ぜひご覧ください。

インターネット体験中! 「アテネ」オープン2周年イベント



情報センター「アテネ」がオープン2周年を迎え、7月12日から16日まで記念イベントが開かれました。子供に大人気のパソコンお絵かき大会をはじめ、インターネット体験会、写真入り名刺づくり、パソコン何でも相談会などに親子連れなどが参加し、マルチメディアを楽しく体験しました。

六月二十四日、瑞巖寺で、「木四銘」の香として名高い「柴舟」を聞く会が催された。

瑞巖寺の平野素雲軒老師と私は骨董好きである。仙台のある老舗で何遍もお会いして、いろいろお話ししているので遠慮がない。少し早く着いて時間があつたので、老師から柴舟や瑞巖寺の上段の間の話を伺った。

徳川家光のころ、長崎に素晴らしい伽羅の香木が入荷した。早速、細川忠興は家臣の興津弥五右衛門に相役一人を添えて長崎に遣わした。同じように伊達政宗の家臣、加賀前田家の家臣も来合わせたから、香木の値は高騰し、興津の相役が「たかが枯木にそのような大金を浪費することは間違っている」と主張。興津は主命に背くことになること言い張り、ついには相役を討ち果たした。

政宗公が亡くなられて以後、この香木は一度も焚かれたことがないといふ。



川井市長の せせらぎトーク

名香『柴舟』

この香木はそれぞれに名が付けられ、宮中に献上された伽羅は「藤袴」、前田家は「初音」、細川家は「白菊」。伊達家は「柴舟」と名付けた。

政宗公が亡くなられて以後、この香木は一度も焚かれたことがないといふ。

ることし、最上部を朝廷にお上げし、残りるを三等分にしてくじ引きにした。結果、上部は前田家、中を細川家、最下部が伊達家に収まった。しかし、帰還した細川家の家臣興津は相役を切り捨てた責任から自害し、伊達家の家臣も香りの優劣に関係はないが、最下部を引き当てたことへの責任を取って自刃している。

瑞巖寺の本堂には上々段の間、上段の間がある。上々段の間は天皇がおいでになった時に使用したために政宗が作った間であり、いまだかつて使用されたことはない。当然のことながら上段の間は伊達家の殿様が座る場所であるが、廃藩置県以来使われたことはないといふ。その場で名香柴舟を聞く会が催されるというのである。聞いているうちににだんだんありがたみが増してきた。メンバーは伊達泰宗氏、瑞巖寺の平野素雲軒老師、浅野知事、そして小生。次に、村松仙台商工会議所会頭、一力河北新報社主などである。本堂の上段の間に移動する時、素雲軒平野老師が先に生まれ、その後を私がこのこついでいった。さっきの骨董談義の続きでくく気楽な気持ちだったのである。観光客がいっぱいで、「なんだあいつ。白石の市長じゃないか。どうして老師の後を知事の前に立って威張って歩くんだろ。」という声が聞こえた。なにも移動する時だけがそうなのであって、聞香の時を知事の次に座るんだがなあ...と思いつつも、テレビで顔を知られているのも不便なものだと感じた。

まず練習ということで、仙台にちなんだ香木「名取川」の間香が行われた。泰宗さん、ご老師、浅野知事と回ってきて私の所に来たら何か様子がおかしい。炭の上に雲母を置いて、その上に香木を置くのであるが、どうも移動の間に転げ落ちてしまったらしく、香も香りがしない。首を傾げていたら、香を焚く人が「下に落ちましたね。どうぞお戻しください。慣れないうちは香炉は回さないで結構です。」と言う。なにイッてる。知事からオレの所に来たときはもう落っこちていたんだ。その後、泰宗さんが伊達政宗公に柴舟を献香したが、その香り、ふくいくとして上段の間全体を覆った。さすがに名香である。知事も感嘆して、献香の後すぐ退席する予定だったのを、柴舟の間香が終わるまで座り続けていた。秘書は気が気ではなかったらう。だが、「一生に一度だから」と言って動く気配がなかった。私もおかげで素晴らしい一日を過ごすことができた。